

津山郷土博物館だより「つはく」

津博

TSUHAKE

2025.2 No.123

トピックス

企画展「作州絣—ひと・こと・もの—展」開催

館長随想

動物園にヒョウがいた（続）—ヒョウの剥製見つかる—

小郷 利幸

資料紹介

考古資料この一点①—有本遺跡の特殊器台—

小郷 利幸

お知らせ

企画展「江戸—目図屏風実物展示—鋏形蕙斎と江戸—」開催

（作州絣）



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

企画展「作州絣ーひと・こと・ものー展」開催

令和6年度企画展として令和7年2月8日(土)から、「作州絣ーひと・こと・ものー展」を開催しています。

本展は、津山市を中心とする岡山県北部の特色ある産業として、県と市の協力で振興し、地域の観光にも貢献した「作州絣」の誕生・発展の経緯と現在行われている復興への取り組みの様子をご紹介します展示会です。

木綿織物の丈夫で素朴な風合いを活かし、現代の感覚にも通じる新鮮なデザインを目指した郷土伝統的工芸品「作州絣」と、時代の移り替りによって現在は廃れてしまった「作州絣」を今によみがえらせるべく活動が続ける「作州絣保存会」の成果を併せてご紹介しています。

期間は2月8日(土)から3月23日(日)までで、会期中、3月2日(日)・16日(日)には作州絣を実際に織ってみるワークショップを開催します。



チラシ



展示のようす



作州絣 きもの



展示解説のようす

動物園にヒョウがいた(続)

— ヒョウの剥製見つかる —

小郷利幸

はじめに

当館の博物館だよりで、日本画家松山政春のヒョウ(豹)の絵(写真1)を紹介したことがある(註1)。ヒョウがいた旧津山市立動物園は津山城三の丸跡にかつてあって、動物園に関わる資料が残っていないため、ヒョウがいたのは概ね昭和30〜40年代、絵が画かれたのも40年代と推測した。その後ヒョウのつがいの剥製が、当館西隣のつやま自然のふしぎ館に展示されていることがわかった(写真2、註2)。

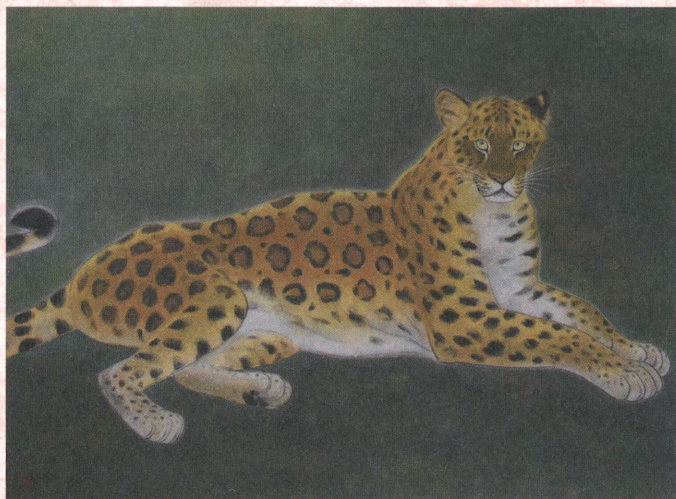


写真1 松山政春「豹」

ヒョウの剥製について

令和4年度の夏休みに、本市教育委員会主催のつやま子ども観光ガイド育成塾が開かれ、その際に私も当館の説明で関わった。つやま自然のふしぎ館の説明を子どもたちがおこなっていた時に、館長の森本信一さんが「このヒョウの剥製のつがいは、お城の動物園にいたものだよ」と教えてくれた。「まさかこんな近くに動物園のヒョウがいたなんて」と私はその当時驚いた。剥製は、目はガラス玉、舌はプラスチックである以外は、本物であることも教えてもらった。その後



写真2 ヒョウの剥製(つやま自然のふしぎ館蔵)

ふしぎ館にヒョウの剥製の製作年代を調べていただいた。年代の特定はできなかったが、昭和48年9月頃には、剥製がすでにあったことがわかった。

おわりに

動物園が開園したのは昭和26年頃で昭和32年には、ヒョウなど51種302匹の動物が飼育されていた。当時は珍しさもあり多くの来園者だった。動物園は平成23年に惜しまれながら閉園となり、これら動物の写真などもほとんど無いので、このヒョウの絵が貴重であると思い前回紹介した。そしてヒョウの剥製が、近くのつやま自然のふしぎ館に残っていたのも、不思議な縁である。ヒョウの剥製自体も津山で実際に飼育されていた、貴重な資料であることは間違いない。

なお、執筆にあたりつやま自然のふしぎ館館長の森本信一さん、学芸員の小原由香理さんにはお世話になりました。

註

(1) 小郷利幸2022「動物園にヒョウがいた―松山政春が描いた日本画から―」『博物館だよりNo.111』津山郷土博物館

(2) 森本信一2010「つやま自然のふしぎ館」『岡山文庫263』日本文教出版株式会社

考古資料この一点⑪

有本遺跡の特殊器台

小郷利幸

はじめに

岡山県南部の吉備地域弥生時代墳丘墓などに見られる特殊な土器に、特殊器台・特殊壺と呼ばれるものがある(図1)。倉敷市の榎築弥生墳丘墓(註1)などに代表され、特定の墳丘墓に伴う例が吉備地域には多く見られる。

津山市など県北の美作地方にも見られるが、特定の墳墓というよりは、墳墓群の中で出土する場合が多いようである。例えば真庭市の中山遺跡(註2)や津山市有本遺跡(註3)などが知られている。その中で、有本遺跡と権現山遺跡A地区の特殊器台(写真1)を弥生時代の展示コーナーに展示しているのが、津山市内の他の類例も含めて今回紹介する。

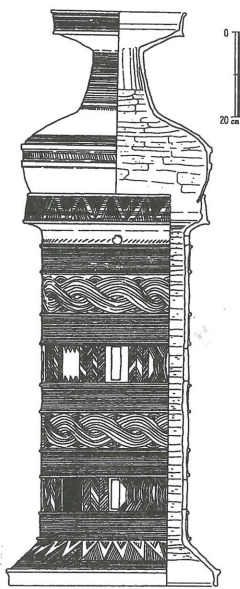


図1 特殊器台・特殊壺
(中山遺跡、註4bより引用)

資料紹介(図2)

津山市内の特殊器台・特殊壺の出土遺跡は、有本遺跡を含め5例程あり、図2にそれらの一部を集成している。特殊器台は、ほとんどが破片で、全体像がわかる物はほとんど無いが、復元すれば概ね図1の中山遺跡のような器形になる。直径が概ね30〜40cm、高さが70〜100cm前後の円筒状の大形の土器で、垂直に立ち上がる口縁と逆向きの底部があり、その間が凸帯により区



写真1 特殊器台・特殊壺展示風景

画され、文様帯と文様の無い間帯が交互にめぐる。文様帯にはS字や綾杉文などの連続文様や長方形や巴形などの透かしが見られ、この文様帯の違いから分類される。一般的には出土した遺跡名から、立坂型↓向木見型↓宮山型↓都月型に変遷するとされる(図3、註4)。

特殊壺は、二重口縁で、頸部が長く胴の張った壺で、胴の最大径部分に凸帯が2条めぐりその間に文様を施すものもある。この壺が図1のように特殊器台の上ののっていたようである。

有本遺跡(図2-1〜6)

下田邑地内にあり、3基の区画墓の内外に、約140基の土墳墓と土器棺10基からなる墳墓群である。

1〜6の特殊器台は、区画墓と土墳墓群を9つのグループに分けた、G・H群の2地点で出土したが、いずれも現位置を保っているわけではない。このため、特定の土墳墓に伴うものかどうかは判断できないが、特定の場所のみ置かれていたのではないかと思われる。ただ個体数はそれ程多くはないようである。なお、特殊壺らしき破片は見られない。

1は口縁部、6は底部で、文様は、2で綾杉文も見られるが、3〜5などはS字文

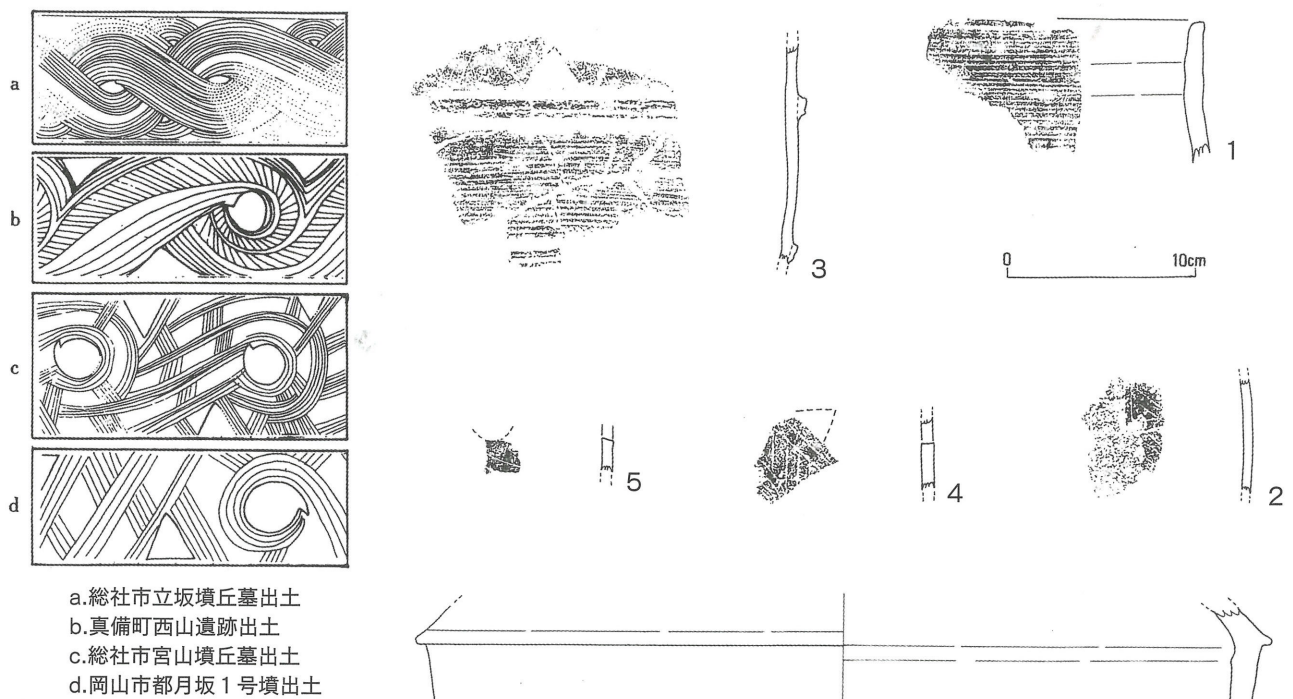


図3 特殊器台文様変遷図
(註4 bより引用)

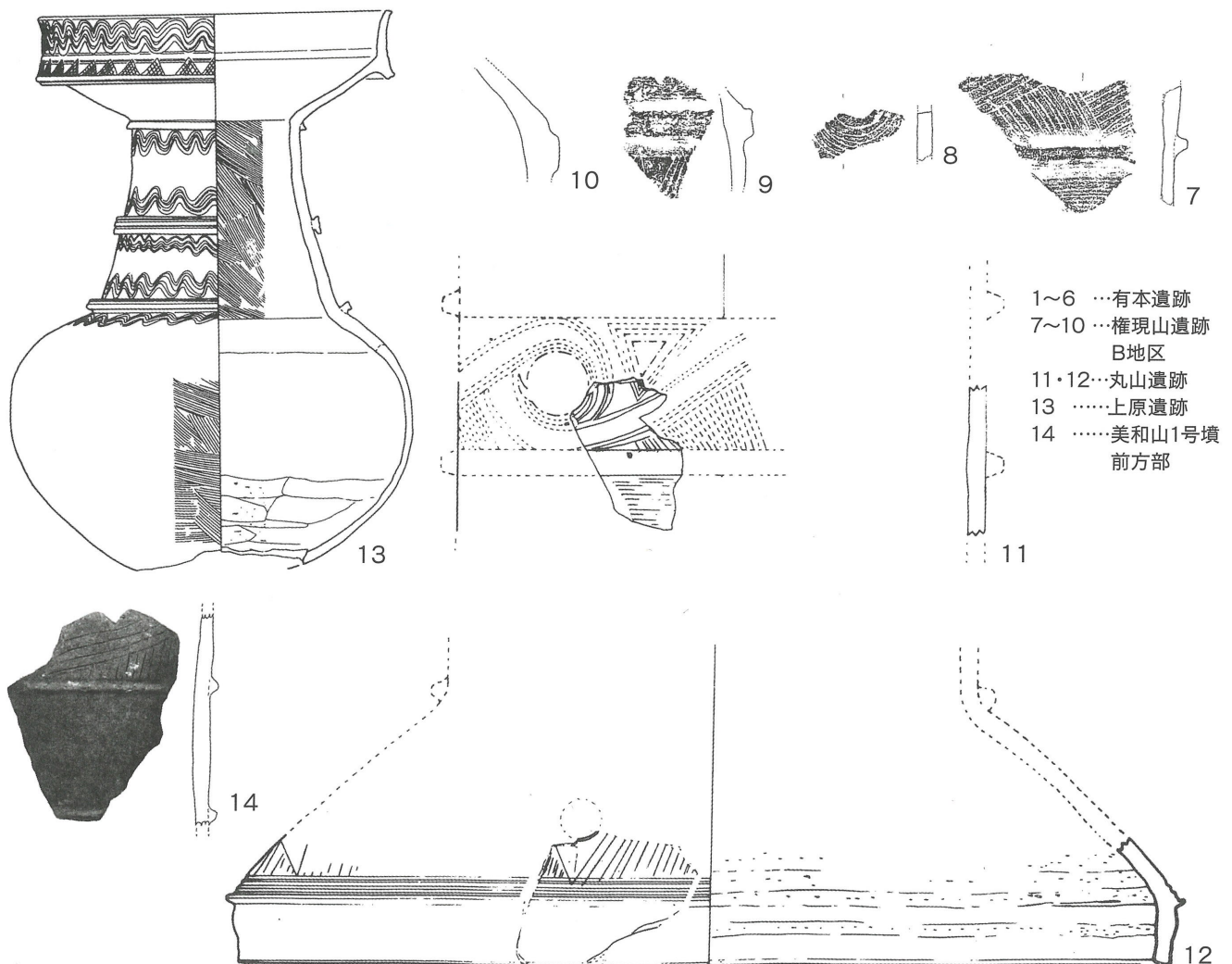


図2 津山市内の特殊器台・特殊壺 (1~14…S=1:4)

がほとんどで、透かしは4は三角と5は円形ないしは巴形である。このためこれらの文様構成から向木見型の範疇である。

また、本遺跡では、特殊器台ではない通常の形の器台と壺による祭祀跡と思われる箇所が、別の場所で出土している。これらは特殊器台に先行する時期のものと考えられている。

なお、本遺跡の別の土壙墓からは、中国の顔料を含むガラスの管玉が出土している。岡山県内で確認できる同様な管玉は本例のみで、山陰地域に類例が見られることが知られていて、以前に資料紹介した(註5)。本遺跡は、県南部からの特殊器台とは別に、北部の山陰地域からの交流の両者があったことが窺える。

津山市内の類例(図2-7、14)

次に津山市内の類例を紹介したい。

権現山遺跡A地区(同1-7、10、註6)

小原地内の墓地の造成に伴い昭和51年に発掘調査され、土壙墓30基、土器棺2基などが検出された。特殊器台と特殊壺片があるが、いずれも遺構には伴わない。7・8は特殊器台のS字の文様帯、9・10は特殊壺の胴部の凸帯部分である。特殊器台の文様から向木見型の範疇である。これらを当館にて現在展示中である。

隣接するB地区(註7)も昭和52年に発掘調査され、土壙墓48基、土器棺2基などが検出されたが、A地区より時期が古く特殊

器台は見られない。

丸山遺跡(同11、12、註8)

皿地内の、老人福祉センターで昭和49年斜面に植樹用の穴を掘った際に、特殊器台片などが採集された。

12は底部、11はS字の文様帯から間帯の破片で、円などの透かし部分である。これら以外に、山陰系の鼓形器台片が出土する。

特殊器台の文様から向木見型の範疇である。地形的に見て、老人センターが丘陵の頂部に建っていることから、この部分に元々墳墓があったものと思われる。ただその墳墓が集団墓であったのかどうかは確認できない。

上原遺跡(同13、註9)

上原地内にあり、岡山大学が昭和41・42年に発掘調査を実施し、13×20mの範囲に土壙墓約40基、箱式石棺1基を検出し特殊器台、特殊壺が出土した。

13は特殊壺であるが、頸部にも凸帯がめぐり、波状文の装飾があり、胴部外面に凸帯は見られない。特殊器台は図示してはいないが向木見型の範疇と思われる。

美和山1号墳前方部(同14、註10)

二宮地内の1号墳前方部に狐など小動物の巣穴が複数掘られていて、その掘り出された廃土内からの採集である。

14は文様帯から間帯、文様帯にいたる破片で、文様の特徴はS字の文様帯で、三角などの透かしの痕跡が上部にある。これら文様から向木見型の範疇と思われる。出土

地は古墳の盛土内と考えられ、古墳の下層や周辺部に弥生時代の墳墓が存在していたものと考えられる。

なお、美和山1号墳(註11)からは線刻がある埴輪が出土しており、美作地域でも特徴的である。もしかするとこれら特殊器台との関連があるのかも知れない。

おわりに

有本遺跡の特殊器台の紹介をかねて、市内の類例をあわせて紹介した。本例のほか、権現山遺跡A地区などほとんどが集団墓に伴うもので、文様構成は、細かな分析まではしていないが、いずれもいわゆる向木見型の範疇と推測される。

特殊器台は明らかに県南部の特定の墳丘墓に見られる儀礼の産物として使用され、それが県北にも伝わり、その分布を見ると(図4、註12)遠くは広島県北部(矢谷弥生墳丘墓、註13)から山陰地方(島根県西谷3号墓、註14)、さらに畿内の古墳にも伝わる。

さらに西谷3号墓は、山陰特有の四隅突出型の墳丘墓でありながら、吉備南部のものと同様、一般的な立坂型の特殊器台・特殊壺やそっくりな一般的な器台などが出土する。そのためそのもの自体がわざわざ運ばれている可能性が高く、少なくとも両者間に交流があり、墳墓の形態は違うものの、特定の墳墓への使用といった本来の使用方法による祭祀儀礼をとっている。

以前に有本遺跡と中山遺跡の特殊器台については胎土分析をおこなっている(註15)。この結果、地元の土器とは明らかに違うグループに分けられ、さらに有本遺跡と中山遺跡も異なる結果となっている。両者の特殊器台は時期の違いもあるが、おそらくこれらも他所からそれぞれ運ばれてきた公算が高い。



図4 特殊器台・特殊壺分布図(註12から引用)

特殊器台・特殊壺が本来は特定の墳墓の儀礼に使用された大形の土器である。県北では中山遺跡に初期の立坂型が見られるように、早い段階から伝播しているが、集団墓内の儀礼などに使用されるなど、南部とはやや違った使用形態となっている。この理由については、明快な回答を持ち得ないが、この時期美作地域では、山陰地域との交流も盛んで、土器などからそれが裏付けられている。このため当時の南部地域と山陰地域の間位置する、本地域の祭祀形態を含めた墳墓のあり方などを検討する上で、特殊器台は良好な資料の一つであるといえる。

註

- (1) 榎築刊行会1992『榎築弥生墳丘墓の研究』
- (2) 落合町教育委員会1978『中山遺跡』
- (3) 津山市教育委員会1998『有本遺跡ほか』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第62集』
- (4) a 近藤義郎・春成秀爾「埴輪の起源」『考古学研究第13巻第3号』考古学研究会
b 近藤義郎1987『特殊器台と弥生墳丘墓』『吉備の考古学』福武書店
- (5) 小郷利幸2021『考古資料この一点①―有本遺跡のガラス管玉―』『博物館だより』つばきNo108
- (6) 河本清・中山俊紀2003『権現山遺跡A地区の発掘調査』『年報津山弥生の里第10号』
- (7) 湊哲夫2020『権現山遺跡B地区』『新修津山市史資料編考古』津山市史編さん委員会
- (8) 河本清1975『津山市丸山遺跡発見の遺物』『津山市文化財年報1』津山市教育委員会
- (9) 河本清2020『丸山遺跡』『新修津山市史資料編考古』津山市史編さん委員会
- (10) 近藤義郎1986『上原遺跡』『岡山県史考古資料』岡山県史編纂委員会
- (11) 河本清氏が採集した資料である。図示した以外に細片が2点あるが接合はしない。図面は筆者が作成。
- (12) 津山市教育委員会1992『史跡美和山古墳群保存整備事業報告書』『津山市埋蔵文化財発掘調査報告第42集』
- (13) 宇垣匡雅2013『弥生時代後期の吉備』『HUMAN vol.04 巨大古墳と王権』平凡社
- (14) 広島県教育委員会・広島県埋蔵文化財調査センター1981『松ヶ迫遺跡群発掘調査報告』
- (15) 島根大学法文学部考古学研究室・出雲弥生の森博物館2015『西谷3号墓発掘調査報告書』『島根大学考古学研究室調査報告第14冊』
- (16) 白石純1998『有本遺跡B地区出土土器の胎土分析』『有本遺跡ほか』津山市土地開発公社・津山市教育委員会

春はつやま 2025 企画展示 「江戸一目図屏風実物展示 ―鋤形蕙斎と江戸―」

鋤形蕙斎は明和元年（1764）に江戸で生まれ、寛政6年（1794）に津山藩に召し抱えられました。この時期江戸では、武家文化人・地方出身者・江戸っ子が一丸となって多彩な江戸文化を創出したといわれています。

鋤形蕙斎は、狂歌の流行を牽引した大田南畝や蘭学者・戯作者の森島中良、出版業者の蔦屋重三郎などと交流がありました。

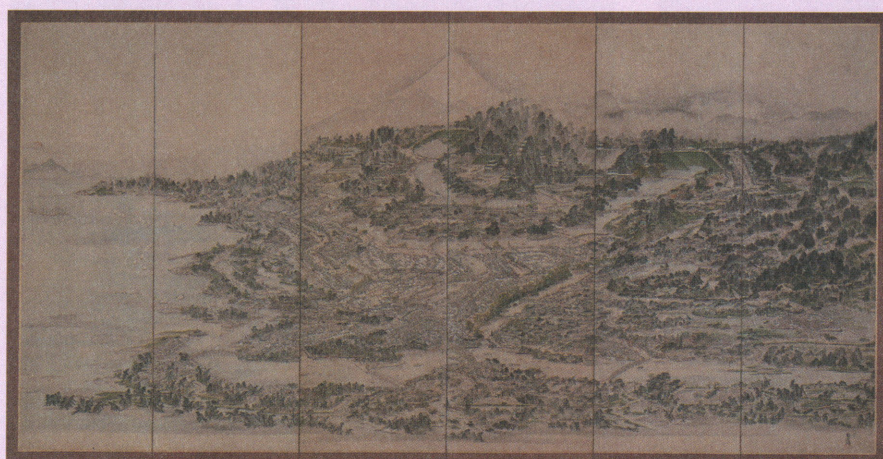
今回は、「江戸一目図屏風」の実物を期間限定で公開、蕙斎が挿絵を描いた黄表紙や『東海道名所図会』などもあわせて展示し、当時の江戸文化を紹介します。

【会期】 令和7年3月29日（土）～5月11日（日）

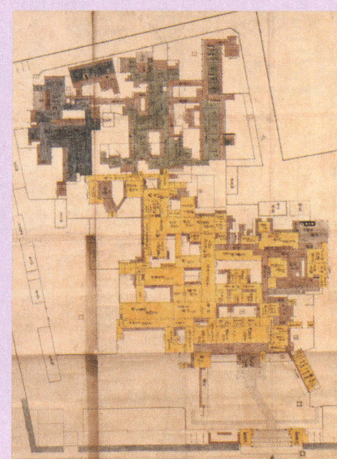
【会場】 津山郷土博物館3階 展示室



略画苑（部分）



江戸一目図屏風（鋤形蕙斎、文化6年）



江戸鍛冶橋藩邸図（部分）



博物館だより「つはく」
No.123 令和7年2月28日



【編集・発行】 津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92

Tel (0868) 22-4567

Fax (0868) 23-9874

E-mail tsu-haku@tv.t.ne.jp



【印刷】 二葉

入館のご案内

【開館時間】 午前9:00～午後5:00

【休館日】 毎週月曜日・祝日の翌日

年末年始（12月29日～1月3日）・その他

【入館料】 一般…300円

（30人以上の団体の場合240円）

高校・大学生…200円

（30人以上の団体の場合160円）

65歳以上…200円

（30人以上の団体の場合160円）

中学生以下・障害者手帳を提示された方は入館料が無料です